

梅津新聞

(近世編⑧)

2021年
1月29日 金曜日

常陸太田市郷土資料館
(西二町 2186)
TEL:0294-72-3201

日本中を巻き込む大混乱 幕末の水戸藩③

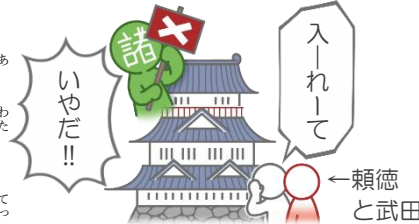
いざ！天狗党VS諸生党

元治元年(1864)7月初め、幕府軍と合流した諸生党と、天狗党が現在の下妻市高道祖でぶつかりました。結果はふいについて夜に「うおー、うおー」



幕末をかけぬけた常陸太田の人たち
石川 部平 天保2年～明治42年(1831～1909)。現在の谷河原町で生まれ、弘化3年(1846)石川家に養子に入り、名を友太郎思和と改めました。幼いころから学問に優れており、安政5年(1858)には諸生党に加わり、農兵を集めて拳兵します。何度か捕われたものの、牢を出た後は、天狗党からの返しを恐れて水戸を離れ、明治2年(1869)より福島をはじめ各地で青藍塾を開いて教育制度の改革に努めました。明治3年(1870)に名を部平と改めました。

一方、水戸藩から派遣された宍戸藩主松平頼徳は、水戸へ向かう途中、諸生党に不満を持つ武田耕雲齋の一隊と合流しました。そして水戸にいる諸生党に水戸城を明け渡しして撤退するよう伝えましたが、これを拒否され頼徳の軍は砲撃を受けます。もともと



頼徳は天狗党の味方というわけではありませんでしたが、砲撃を受け、やむを得ず諸生党と戦うことになりました。やがて争いの構



図は、「諸生党と幕府軍」対「天狗党と水戸の追討軍(宍戸藩)」となり、各地へ広がっていきます。そのような中、10月、やむを得なかつたとはいえ、幕府軍に攻撃したことの責任を取るため、頼徳は切腹させられてしまいました。

さて、天狗党と諸生党の戦いはさらに激しくなっています。諸生党が攻撃を仕掛ければ天狗党はそれに反撃、一進一退を繰り返すうちに、ついには両軍の中から降参する者も出てきます。そんな状況を見かねた天狗党の藤田小四郎と武田は、北の方へ一時撤退しました。



北へ一時撤退した天狗党は11月、京都を目指して西へ出発しました。目的は、京都にいる一橋家当主慶喜を通して、攘夷達成の勅許(天皇の許可)をもらうためです。一方幕府軍は、天狗党が通ると思われる藩に人相書きを配り、討ち取るよう命じました。

幕府軍を避けるため越前(現在の福井県北部)へと遠回りした天狗党は、雪で足元が不安定な峠を抜け、出発から約40日後、敦賀(現在の福井県中部)へと到着することができました。しかしこの時、すでに幕府は多くの藩を集めて天狗党を包囲していたのです。そしてこれらの藩を率いていたのが、天狗党が頼みとしていた慶喜でした。天狗党の中には応戦しようとする者もいましたが、

総大将の武田は同年12月慶喜に降伏文を渡し、翌年の慶応元年(1865)2月、天狗党は処刑されることとなりました。筑波山に拳兵してから約1年、天狗党の目的は道半ばに終わったのでした。

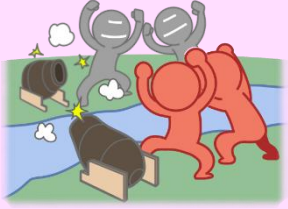


さいごわる
最後の悪あがきもむなしく...

このとき、常陸太田では…

幕府は騒動を収めるためにさまざまに藩に命を下していました。その一つが、二本松藩（現在の福島県北部）です。当地方は、元々地元の諸生党たちが守っていました。元治元年9月1日、二本松藩士が合流することです。そう守りが強化されました。

9月4日、藤田小四郎率いる天狗党が、土木内から上陸しようとしていました。しかし二本松軍にこれを阻止され、翌5日河合から上陸すべく船を向けました。そのため5、6日にかけて、久慈川を挟んだ戦いが繰り返されます。天狗党が大砲を撃てば二本松軍も撃ち返し、初日は激しい撃ち合いが続きました。日没を迎え互いに本陣に戻る



と、天狗党は軍隊を分けて攻撃と防御を強化し、二本松軍は本陣を枕石寺（上河合町）に移して守りを固めました。翌6日も朝から大砲による撃ち合いが始まり、日が暮れてもその砲撃は止まなかつたといひます。しかし二本松軍のふんば

りにより、天狗党は上陸することができませんでした。

しかし天狗党を退けて間もなく、今度は天狗党本隊から分裂した田中愿蔵がやってきました。9月9日、岸につないであった船を盗んで川を渡ろうとしていた田中隊に向け、二本松軍は対岸の茂みに隠れて矢を放ちました。矢を受け

た田中隊は引き返した後一斉に銃撃を開始、久慈川を挟んで激しい銃撃戦になったといひます。この時は、田中隊が比較的守りが薄かった現在の日立市留町のあたりに移動し、そこを守っていた軍に勝利しました。その後も田中隊は、途中二本松軍と諸生党の連合軍と何度もぶつかり、互いに犠牲者を出すなど苦戦しますが、17日には助川城（日立市）を奪い取るなど、その勢いは誰も止めることはできませんでした。しかしついに26日朝、幕府軍の総攻撃を受け、抵抗することができずに北へ逃げ帰りま

を、農民が代官所に知らせたため捕まり、16日に処罰されたのでした。この騒動で戦死した二本松藩士の墓が、現在の鯨ヶ丘トンネルの近くにあります。



▲二本松藩士の墓

えどばくお 江戸幕府が終わるとき…

さて、水戸藩が慌ただしい頃、日本はどのような状態だったのでしょうか。

長州藩…文久3年（1863）に下関海峡を通る外国船を砲撃し、翌年アメリカ、イギリス、フランス、オランダの艦隊から仕返しを受け、負けました。薩摩藩…文久2年、生麦村（現在の神奈川県横浜）で、藩士の父の行列を横切ったイギリス人を、藩士が切りつけたことから（生麦事件）、翌年、仕返しにイギリス艦隊からの砲撃を受けました。どちらの藩も攘夷の対象である外国人から仕返しを受けたことで、実力差を思い知ることとなります。そして薩摩

幕末をかけぬけた 常陸太田の人たち

町地連東の 田中愿蔵 現在の東連地町出身。乱暴なふるまいで多くの民衆を怖がらせたが、それは尊王攘夷を達成するという強い思いから出た行動でした。元治元年10月16日に処罰されました。⇒近世編⑦・⑧のとおり

藩や長州藩を含む攘夷派は攘夷が不可能だと分かると、目的を倒幕に移してきます。そして慶応2年（1866）2つの藩は、倒幕のためのさまざまな協力に約束する薩長同盟を結びました。一方幕府では、慶応2年8月に慶喜が第15代将軍に就任しました。この頃の日本は「ええじゃないか」とはやし立て踊る騒ぎや、世直しを期待する暴動（一揆）に加えて、薩長同盟をはじめとする倒幕の動きが見られたことから、慶喜は將軍になった翌年、朝廷に政権を返すことを決めました。いわゆる「大政奉還」です。それを受けた朝廷は「王政復古の大号令」を出し、天皇の政治に戻ることや幕府を廃止することを宣言しました。こうして約260年間続いた江戸幕府は滅亡したのでした。